



で き ご と

6月28日(水)に、静岡県立中央図書館の図書館講座として、子ども図書研究室講演会を開催しました。

講師に宮川健郎^{たけお}氏(明星大学人文学部教授)をお迎えし、「子どもと読書 - “読み聞かせ”から“ひとり読み”へ」というテーマに基づいてお話を伺いました。

今回の講演は参加者が100人を超え、子どもの読書活動に対する社会の関心の高さが感じられました。

参加した方は講演に耳を傾げるだけでなく、真剣にメモを取り、また質疑応答の時間には子どもに読ませたい本に関する質問を積極的にするなど、熱心に参加していました。

(裏面にて、概要を紹介します。)

子ども図書研究室のテーマ展示 ただいま展示中です!

「紅葉・黄葉・落ち葉の本」

第52回青少年読書感想文全国コンクール課題図書
静岡県夏休み推せん図書等

全国学校図書館協議会選定第39回夏休みの本
新着図書も常時展示中です。

イベント情報

講演会・学習会・読書生活者を育てる

講師：安居^{ふさこ}總子氏

日時：8月28日(月)

13:30～16:00(受付開始13:00)

会場：小笠教育会館 大会議室

(静岡県掛川市杉谷734-4)

問合せ先：掛川市子どもの読書活動を考える会
事務局 松下

(TEL/FAX 0537-24-2462)

新着図書から

物語

『草花とよばれた少女』



シンシア・カドハタ / 著

代田亜香子 / 訳

白水社

2006年5月

主人公はアメリカに住む日系3世の少女。両親を失い、花農家である祖父やおじ一家と暮らすスミコの将来の夢は、花屋を経営することだった。第2次大戦が始まり、日系人は次々と収容所に移されるが、スミコは収容所でも花を植え、庭を作り、一度は見失った夢を取り戻す。

開戦前後の日系人社会に加え、「インディアン」の少年との交流等も通して、少数派に属する人々の生き方を温かいまなざしで描いている。

著者も日系3世。『きらきら』で昨年のニューベリー賞を受賞している。【中学生から】(鈴木)

絵本

『ハンダのびっくりプレゼント』



アイリーン・ブラウン / 作

福本友美子 / 訳

光村教育図書

2006年4月

ケニアの少女ハンダは友達のアケヨに果物をプレゼントするため、果物が入った籠を頭に載せ、アケヨの村へ歩き出した。ところが、ハンダが全く気付かないうちに、動物達が次々と頭の上の果物を食べてしまう。ハンダの「(アケヨが好きな果物は) かな?」の「言葉」と動物がその果物を取っていく「絵」の対比のおもしろさ、そして、次の動物が登場する場面で去っていく動物まで丁寧に描かれていることなど、まさに読んでもらうことで楽しめる絵本。結末はハッピーエンド。【幼児以上】(殿岡)

子ども図書研究室講演会 報告

講師の宮川健郎氏は児童文学作家の宮川ひろ氏を母に持ち、児童文学の研究書や児童書のブックガイドなど、数多くの著作がある。

講演は、大学の学生やご自身のお子さんとの体験談など、身近な例を交えて行われた。



まず、「読み聞かせ」と「ひとり読み」は一連の流れのなかにあるのではなく、文化が違うものである、という内容から講演は始まった。

「読み聞かせ」は大人が声で物語を届ける“声の文化”であるが、「ひとり読み」(黙読)は文字で書かれた物語を自分の目で読み取る“文字の文化”である。また声は元から人間に備わっている、本質的なものであるのに対し、文字は社会によって作られた、人工的なものである。それゆえ、両者は文化の異なるものであり、どちらが遅れている・進んでいるといった段階の違いのものではない。

加えて、「読み聞かせ」に向けた本と「ひとり読み」に向けた本、それぞれの違いについても触れられた。

「読み聞かせ」では音の響きがよく、ストーリーに動きのあるものが求められるが、「ひとり読み」では心理描写・風景描写のきれいな文章が好まれる。例えば『だれも知らない小さな国』(佐藤さとる/著 講談社)は、「ひとり読み」の本としては日本児童文学の先駆的な作品として評価されているが、当初「読み聞かせ」の本として読まれた時、あまり評価されなかった。

このように、「読み聞かせ」と「ひとり読み」の楽しさは違うものであるため、「読み聞かせ」から「ひとり読み」への、そのままの移行は難しいのではないだろうか。

では、実際に「読み聞かせ」から「ひとり読み」へ移行するにはどうしたらよいだろうか。宮川氏はその答えの1つとして、無理にひとり読みをさせるのではなく、十分に読み聞かせを行うことを挙げられた。声をたくさん聞かせることで、子どもの中のコップが声でいっぱいになり、それがあふれたら、自ら読むようになるのではないかと、ということである。

さらに、「読み聞かせ」と「ひとり読み」の間を埋めるような本についても触れ、例として富安陽子氏の本を挙げた。この段階の本はあまり多くはないが、このような本を間に挟むことで、移行がスムーズになるのではないだろうか。

また、早く「ひとり読み」が出来るようになって欲しいと「ひとり読み」を急かすのではなく、いくらでも「読み聞かせ」をしてあげるような、子どもの自発的な読書を見守るスタンスが大切なのではないかと、とも述べられた。

これらの話題以外にも、童話と児童文学の違いや児童文学の成立など、子どもを取り巻く児童書の変化についても言及された。



所蔵資料から

案内 『齋藤孝の朝読おすすめガイド
10+100』



1 絶対、感動！
齋藤孝 / 著
宮川健郎 / 編集協力
岩崎書店
2005年1月

子どもが読む本に迷ったときに手がかりとなるブックガイド。作者お勧めの10タイトルに加え、その10タイトルの次に読む100タイトルも合わせて紹介している。また読みものとしても楽しめるように工夫された、テキストにも注目したい。【小学生高学年から】

(渡辺勝)

*表紙画像はすべて出版社の許可を得て掲載しています。